飛鳥における凸面布目平瓦の一事例

はじめに

飛鳥藤原第113次調査（高所寺池堤防改修にともなう事前調査）で50点ほどの凸面布目平瓦（以下、凸布）が出土した。これらは、井戸SE9330の埋土や遺物包含層などから出土したもので、伽藍などの寺院遺構にともなうものではない。しかし、その内容には非常に興味深い点がある。今後の凸布に関する研究の進展のためにも当該資料を紹介したい。また、一部ではあるが、川原寺出土の凸布についても再検討を試みたい。

第113次出土の凸布　１～４類に分類できる。

１類　全長や幅などは不明。厚さは1.7～2.2㎝。凸面には側板痕が明瞭に残る。側板の幅は2.5㎝前後。各側板には縦方向に約4.5㎝間隔で長径５㎜ほどの楕円形の凹みがある。布を側板に留めたつけた撚紐の圧痕と考えられる（以下、布留痕）。また、糸切痕や粘土板合わせ目が確認できるものもある。凹面は棒状の工具を用いてヨコ方向になでる。ヨコナデの後、タテナデを施すものもある。叩きなどの痕跡は一切残さない。側面は凹凸両面側から深い面取りをして断面剣先形に加工するものと、分割面を削り凹凸両面側から面取りするｃ３手法[1]のものがある。焼成は須恵質で胎土は精良。クサリ礫を含むのが特徴である。側面と凹面の調整の方法や、胎土と焼成の特徴などから荒坂瓦窯産と推定できる。

２類　全長や幅は不明。厚さは1.7～2.4㎝。凸面に残る側板痕はあまり明瞭でなく平滑である。側板の幅は2.5㎝程度。布留痕もみられるが、明瞭ではなく、縦の間隔も約14㎝と広い。糸切痕や粘土板合わせ目が確認できるものもある。凹面調整はタテナデ。側面調整はすべてｃ３手法。焼成は須恵質になるものが多い。胎土は石英や長石を多く含み、１類に比べると粗い。

３類　全長や幅は不明。厚さはほとんどのものが1.6～2.3㎝であるが、3.0㎝と厚いものもある。糸切痕を明瞭に残すものが多い。また、凸面に10㎝ほどの撚紐の圧痕がみられるものがある（図24）。１・２類のような小さな布留痕が凸面に確認できないことから、これも布を側板に留めつけたものと考えたい。撚紐が布目の上にあることも傍証となろう。ただし、すべての側板にあるわけではない点は注意が必要かもしれない。側板に布を留めつける箇所が少ないのだろうか。このような資料が増えることを期待したい。

３類の側板痕は平滑で不明瞭なものと凹凸の明瞭なものがある。側板幅は2.5㎝前後。凹面調整は砂粒の動きが大きい特徴的なヨコナデ。１・２類と比べるとナデによる凹面の凹凸が著しい。側面調整は分割面を削り凸面側のみを面取りするｃ２手法が多く、ｃ３手法もみられる。焼成は硬質のものとやや軟質のものがあり、色調も灰色、黒灰色、灰白色、橙灰色など様々である。

４類　赤褐色や橙褐色を呈する焼成不良の一群である。側面は剣先形とｃ３手法のものがある。凹面調整は工具を用いたヨコナデ。これらの特徴は１類に類似している。１類の焼成不良品の可能性もあると考えられる。

１～４類のすべてに共通するのは、糸切痕や粘土板合わせ目が確認できることである。これらの痕跡から考えると、布を留めつけた桶型の内側に粘土板を貼りつけて粘土円筒を作成した桶型内巻作りであるといえる。

また上記のうち、３類は側面や凹面の調整手法において１・２・４類と違いがみられ、側板に布を留めつける方法も異なっている。このような凸布はどこの寺のものなのだろうか。第113次で凸布が多く出土したSE9330は藤原京左京七条二坊西北坪にある。この付近の寺院跡といえば、左京八条二坊に位置する小山廃寺が思いつく。

小山廃寺は字名「キデラ」から紀寺跡に推定されている。この小山廃寺からも凸布が出土している[2]。

小山廃寺の凸布には多様性がある[3]。側面調整は剣先形のものもあるが、ｃ２・ｃ３手法のものが多い。焼成も灰黒色や黄灰色、灰白色などを呈す。凹面は砂粒が大きく動くヨコナデ。これらの特徴は３類に酷似している。長い撚紐の布留痕の有無は不明だが、凸面の側板痕が不明瞭で平滑なものがある点などから考えて、３類は小山廃寺の瓦とみて間違いないだろう。

川原寺の凸布再見

川原寺の凸布には糸切痕や粘土板合わせ目が確認できるとともに、桶の合わせ目が観察できる資料がある[4]。このことから、川原寺の凸布は展開した桶に粘土板を貼りつけ、桶もろとも巻きつけて粘土円筒を作成する桶型内巻作りであると考えられている[5]。粘土円筒を作成する際、桶の合わせ目と粘土板の合わせ目が一致しないのは、

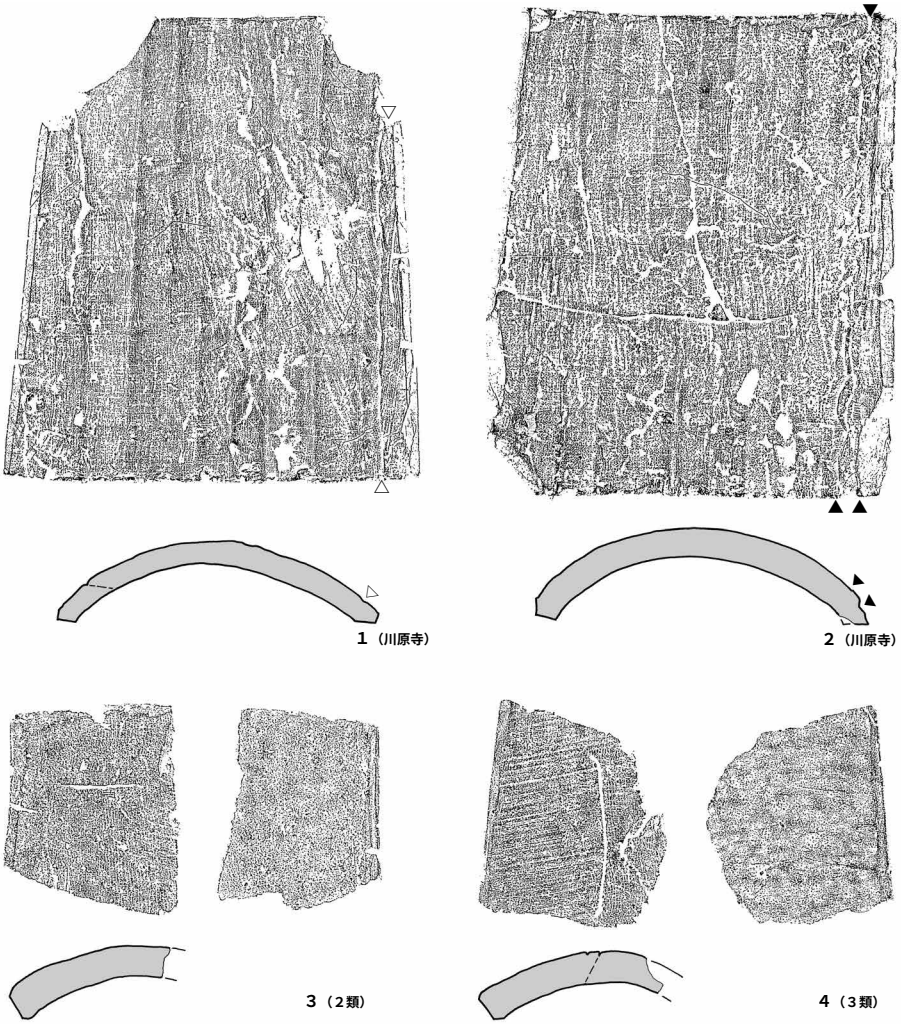

図22　飛鳥の凸面布目平瓦　1～2＝1：6　3～4＝1：5

図23　川原寺出土凸布細部

図24　凸面の長い撚紐痕跡

桶型に粘土板を貼りつける際に「のりしろ」部分を設けるためである[6]。この「のりしろ」の長さについては、中井公氏よりご批判をいただいた[7]。そこで再度、川原寺の凸布について検討してみたい。

図22－1は、凸面の右端に布端の綴じつけがみられるとされた資料である（△の部分）[8]。一方、図22－2は2箇所の布端の綴じつけの間に布目の及ばない一枚分の側板痕がある（▲の部分）。この両者の布端の綴じつけを比較すると、布の引っ張られ方に違いがみられる。後者に比べ、前者の方が布の引っ張られ方が弱い。また、図22－1の右側縁にはわずかながら布目が確認できる（図23）。もし、当該部分が布端の綴じつけであるならば、右側縁にみえる布目は逆方向に引っ張られると考えられる。おそらく、布留痕のすぐ脇をヘラケズリしているために布端の綴じつけのようにみえたのだろう。

上記のように考えて川原寺の凸布をみると、布端の綴じつけは瓦の右端に、粘土板の合わせ目は瓦の左端に確認できる例が多いことに気がつく。中井氏が指摘されるように、「のりしろ」はわずかな幅で、その両者の間で分割されている可能性が高いと推測できる。

本来ならば、側板パターンを検証し、粘土板合わせ目と桶の合わせ目の出現傾向を分析する必要があるが、現段階ではそこまで到達できていない。この点の解明にはもう少し時間がかかりそうだ。徐々に解明されつつある凸布だが、その謎はまだまだ深い。　（小谷徳彦）

注

1）大脇潔「研究ノート丸瓦の製作技術」『研究論集Ⅸ』1991。
2）奈良県立橿原考古学研究所「明日香村紀寺跡第７次発掘調査概報」『奈良県遺跡調査概報（第二分冊）』1992。
3）小谷徳彦「凸面布目平瓦の製作技法とその系譜－大和盆地出土例を中心として－」『帝塚山大学考古学研究所研究報告』Ⅲ、2001。
4）花谷浩「川原寺の調査－1995-1・1996-1次」『年報1997-Ⅱ』1997。
5）展開した桶に粘土を貼りつけて桶ごと円筒状にする技法は大脇潔氏によって提唱された。大脇潔「古代造瓦技術に関する一考察－凸面布目平瓦の製作技法を中心として」『奈良国立文化財研究所第50回公開講演会資料』1981、「凸面布目平瓦再考」『帝塚山歴史考古学研究会第７回発表資料』1984、「凸面布目平瓦の製作技術」『古代の瓦を考える－年代・生産・流通』1986。
6）前掲注３。
7）中井公「凸面布目平瓦研究の最近の動向について」『藤澤一夫先生卒寿紀年論文集』2002。
8）前掲注４。